第 40 回　防災カフェを開催しました。

災害支援　これからの姿とは

～被災地に合ったボランティア支援～

ゲ　ス　ト：前原 土武　さん

(災害 NGO 結～Yui～　代表)

日　時：2019 年 8 月 22 日（木）18：30～20：30

場　所：滋賀県危機管理センター１階　エントランスホール

ファシリテータ：高橋 宏和　さん

(滋賀県社会福祉協議会　事業部門　地域福祉課　課長)

ゲスト　前原 土武　さん

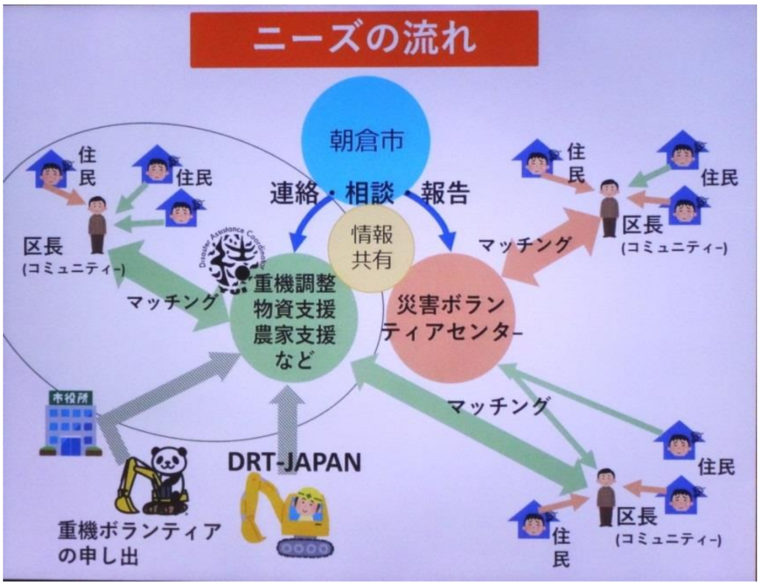
昨年も、大阪北部地震、西日本豪雨、北海道胆振東部地震など多くの災害がありました。被災地のニーズに合ったボランティア活動を迅速に効果的にするにはどうすればいいのか。これまでの支援の経験を聴き、災害支援について一緒に考えました。

前原さんは、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災からボランティア活動に関わってきました。地震が起きたとき東京にいた前原さんは 3 月 20 日には仙台市に行き、スコップなどを使っての支援をしていましたが、4 月のはじめからは全国から集まったボランティアの調整とかコーディネーションを始めたそうです。自分が 8 時間スコップで作業をしても 8 時間分しか進まないけれど、1000 人、2000 人が組織的に 5 分作業できるように調整すれば、もっと早く効率よく復旧していくと考えたからということでした。

現在は、災害 NGO『結』の代表として災害が起きるといち早く自動車にバイクや支援物資を積んで被災地に行き、小回りの利くバイクを使って情報を集めるとともに、ボランティアセンターの立ち上げ、ボランティアの調整や支援、また、講演を通して災害支援を伝える仕事をしているということでした。その際に、それまでに就いた仕事や外国を渡り歩いた経験が生きているそうです。

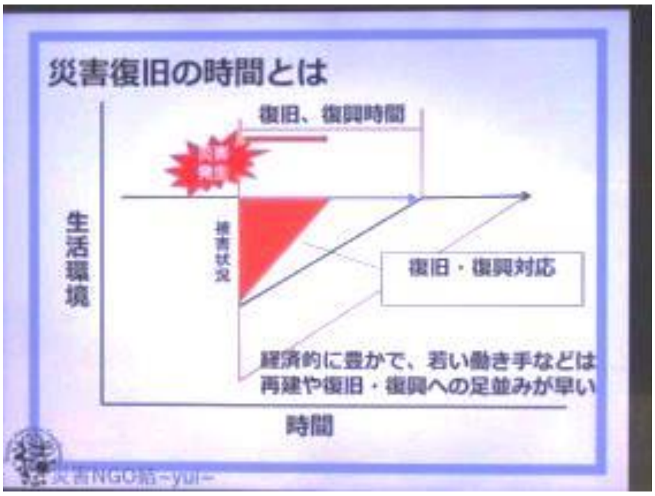
前原さんは、１つの被災地に１年とか２年間いて、そこから次の被災地に行ったりするもあるそうで、例えば 2013 年は、多くの災害が起きたので、阿蘇市→山口市→島根県→滋賀県高島市(約 1 か月)→伊豆大島と日本列島を移動しながらボランティアセンターの立ち上げなどを支援していたので、まるで遊牧民のような生活だったということでした。

初めて被災したところでは、社会福祉協議会もボランティアセンターを立ち上げるのは初めてなので、前原さんたちのような最初のステップの立上げに関わった人のアドバイスを受けると、うまくスタートできるため０から１の部分への支援が大切だということした。



被災者のニーズに応えるために３者の情報共有は必要

豪雨による災害が起きても、地域の特性によって、また同じ地域でも人によって被害の状況が違います。例えば、浸水すると復旧には泥かきが必要ですし、土砂や流木があると重機が必要になるので、状況に合わせて調整する必要があります。また、専門性の高いボランティア（プロボノ・ティニカルボランティア）がその専門分野を生かして支援することが必要になってきます。なので関わる人たちが情報を共有して何がどこで必要なのかを考えて支援活動をすることが重要です。このような状況から 2016 年に JVOAD 全国災害ボランティア支援団体ネットワークは設立され、社会福祉協議会・災害ボランティアセンター、行政と民間支援セクターの３者が連携できるよう調整するようになりました。



被災するとそれまでの生活環境が著しく低くなります。また、その地域がもともと抱えていた高齢化、過疎化、財政難といった課題が肥大化します。それを元に戻していくことが復旧・復興であると考えると、下がり方や元に戻るまでの時間は人それぞれ違いま

す。防災をしておくと、その下がり方を和らげる効果があるということが言えます。

前原さんが、バイクで被災した人の所へ行くと、初めのうちは困っていても「助けて」とはならないのですが、丁寧に話を聴いていると徐々に受け入れられ、「お願いしたいんだけど」となるそうです。被災した時、受援力（支援をうける態度）を持っていることが復旧を助けるということでした。

『被災者への支援の限界は、支援者の限界であってはならない』また『泥をすくうのではなく、心を救っている』と思って活動されていること、「災害が起きたからこの人と出会えたとか、起きてしまった過去は変えられないけれど、未来を変えることはできると思っていて、被災した人たちに対して私たちは何が重要なのかということを考えている」そして「私は支援をしないという支援をします。自立を促すためにもできることを奪わないように見守るように心がけています」というお話が印象に残りました。

参加者からは多くの質問がありました。その一部を紹介します。

問：災害支援で０から１は具体的にどのようにするのですか？

ファシリテータ　高橋　宏和　さん

答：鬼怒川決壊の時、常総市には初めの週末に一日で 3500 人のボランティアが集まったため、センターの立ち上げ経験のある人を市に派遣しました。はじめは多くの人が集まりますが、日が経つにつれ関心が低くなるので、初めに集まった人たちが再び来てくれるためには最初の受け入れが大切です。全てのボランティアを受け入れように調整します。また自治会に人を送る時、自治会長さんに「まず家財出しをしましょう」「次に泥かきをするんですが、土嚢に入れるよりも一輪車などで集会場などの運んだ方がいいですよ」というように助言します。家財を出す間はスコップは必要なく、その間に準備できるのです。はじめがうまくいくとボランティアセンターも慣れてきてスムーズに運営できるようになります。

前原さん、高橋さん、参加者のみなさん　ありがとうございました。